

第 I 部 高地先住民をめぐる現状認識

第1章 アンデスにおける先住民とは

藤田 護

先住民に関する議論を開始するにあたり、最初に確認すべきは、中米地域を対象とした同様の JICA 客員研究の報告書¹も述べるとおり、先住民という呼称は植民地主義によって生み出されたものであり、植民地主義とそれが生み出した差別の構造なくしては存在しないということである。従って、現代における先住民運動も、先住民という存在の各国における承認 (reconocimiento) と併せ、各国の 19 世紀の独立にもかかわらずそれ以降も現代まで残存する (国内) 植民地主義からの脱植民地化 (de-colonización)、そして政治面では先住民自身による政治権力の獲得などを、スローガンとして掲げることとなる。

特に 20 世紀最後の四半世紀は、「先住民の回帰」(例: Albó, 1999、Stavenhagen, 2002) とも呼ばれるべき時期であり²、アンデス諸国の特にエクアドルとボリビアにおいて、先住民運動の高まりや政策議論における多文化主義の導入と展開など、様々な意味で「先住民」のプレゼンスが高まった。エクアドルにおいては、1986 年の高地部とアマゾン低地部を統合した先住民全国組織 CONAIE (Confederación de Nacionalidades Indígenas del Ecuador) 結成の後、1990 年代からの頻発する先住民の抗議行動は政府の政策推進に大きな影響力を行使し、先住民言語とスペイン語の二言語教育推進などを要求するとともに、1998 年には憲法が改正されエクアドル国家の多文化的性格が認められ、各種の先住民の権利が規定された。ボリビアでは、長年展開されたアイマラ先住民運動 (カタリスタ運動) および 1990 年代に全国的な存在感を増した低地部の先住民運動の動きから、1990 年代には国の多文化的性格を承認する形での憲法改正が行われ、先住民共同体による土地の集合的所有などが認められ、2000 年代に入り先住民勢力が国家権力を掌握するにまで展開した。その動きは様相の異なるペルーにおいても一定の影響を及ぼすとともに、同国では多くの血が流れた内戦の時代を経て民族差別の根深い存在が改めて脚光を浴びることとなった。これらは、新しい現象であると同時に、歴史への視点を抜きにしては理解できない側面を多分に有している。

本章の目的は、アンデス 3 ヶ国において「そもそも先住民とは何か」についての考察である。特にここでの関心は、実際にこれらの国々で国際開発協力に従事するにあたって必要とされる先住民に関する知識がどのようなものであるか、というところにある。もちろん実務に携わるにあたり研究の専門家と同様の歴史と社会に関する知見を有するというのは非現実的であるかもしれないが、同時に実務家として現地の政策担当者および知識人との間での議論の機会において、単純すぎる物の見方を回避し十分な視野の広がり確保することは必要不可欠であろう。大きくは、アンデス 3 ヶ国における先住民の歴史の大まかな見取り図、先住民をめぐる現代アンデス諸国の社会状況、そして先住民をめぐる政策議論などが関心事項となる。そのような同時代的な議論の空間 (espacio discursive) の 1 つの様相を描写することで、第 II 部における個別の検討の前提条

¹ 小泉、池田、鈴木 (2006)。

² 「回帰」という単語を用いると、以前盛んであったものが再度盛んになる、あるいは存在しても抑圧されていたものが表面化するという理解の仕方となるが、近年になり初めてこれほどまでに大々的に運動が生まれたことを強調して理解しようとする考え方も存在する。

件となる政治・社会状況を確認する。同時に、本章は、社会関係の改善に向けた取り組みを考察する第7章と密接な関係を有する。

これに向けて、本章ではまず1-1で、本客員研究と同時期に実施・発表されたアンデス諸国の先住民問題を主題とする研究成果から得られる知見を検討する。ここでは、オックスフォード大学の研究センター（Centre for Research on Inequality, Human Security and Ethnicity：CRISE）が実施中の民族面を中心とする集団間不平等（group inequalities）³の諸相に関する研究プログラム、およびラテンアメリカ人類学に関して発表されたハンドブックの中から、アカデミズム内部のみで重要性を持つ議論を取り除きつつアンデス社会における先住民に関する論点を俯瞰する。前者が国際開発協力と密接に結びついた観点からの研究であるとするれば、後者は同じテーマを取り扱いつつ各国の先住民と先住民運動をめぐる状況とより密接に結びつき、多くの国際開発協力活動が時には直接関わりつつ、時には活動が行われる前提条件に関係するものであると位置付けられよう。これらを踏まえた上で、1-2においては、2007年8月におけるペルー、エクアドル、ボリビアへの現地調査で得られた知見を検討する。1-3においては、主要な点をまとめるとともに、実践的含意について述べる。

1-1 近年の注目される研究成果

1-1-1 不平等・人間の安全保障・エスニシティ研究センター（CRISE）（オックスフォード大学）⁴

この調査の関心は、特に民族を中心とする集団間の不平等が国内紛争の増大につながりうる可能性にあり、この状況を回避する／改善するためには地域研究（area studies）と歴史に注目したアプローチが必要である、と考えるところにある。

この研究センターは「水平的不平等（horizontal inequalities）」と中心的概念として据えている⁵。この用語は若干分かり難いが、個人を基準としてランク付けをするという意味で垂直的な不平等の捉え方に対して、個人の集団への所属を重視し、ある文化的アイデンティティを共有すると緩やかに考えられる（民族的、人種的、宗教的）集団間の（水平的）関係を問題にする。当初の関心としては、このような文化的差異が政治的・経済的・社会的資源へのアクセスへの不平等と重なるときに、これを「水平的不平等」と名付け、暴力的事態が発生しやすくなるのではないかという仮説が立てられる。特に集団間の境界に流動性がなく、多様な集団間で自らのアイデンティティを変えていくことが困難な場合が注目の対象となる。

調査対象となっているラテンアメリカ全体に関して指摘されている点のうちで、重要なものを挙げてみよう。第一に、エリート層と中間層の大半が非先住民層によって構成されがちな社会においては、民族と民族間の平等について議論すること自体が不安を惹起するものであり、議論自

³ 民族面に加えて宗教面での集団間の異質性も扱われる。

⁴ <http://www.crise.ox.ac.uk>

⁵ この段落の記述はStewart（2003）を基にしている。

体を回避しようとする傾向が生まれると考えられる。第二に、政治紛争において民族性が動員の主軸とならない場合にも、紛争の過程において民族性が大きな影響を与える場合があるという点である。この文脈において、ペルーにおけるセンデロ・ルミノソの時代に、本来は民族間対立を軸とはしなかった紛争の過程で犠牲者の圧倒的多数が先住民層に属していた点が指摘されている（グアテマラ内戦も同様の文脈で大きな位置付けを得る）。

また、ここでの研究上の関心は、先住民層が担う集合的行動によって、各地方自治体およびそれよりも広い範囲の政治的舞台上、自らが置かれた状況を改善しようとする有効な流れが生まれうるか、という実践的関心とつながる⁶。逆に言えば、不平等な位置にある集団が自らの状況を改善しようとする集合行動（collective action）がなぜうまくいかないのかという問題となる。特にペルーからの事例をもとにこの点を考察したのが、Muñoz, Paredes and Thorp (2007) である。ここでは、政治体制において、地方政府の行政能力が低く、パトロン・クライアント関係が広範に存在し、伝統的政党などが信頼を失っている状況では、集合行動をおこすにあたって貧困層の方がより大きな労力を払わなければならない、これが市ごとの個別事例を超えたより広域的な範囲での状況改善の妨げとなっているという考察がなされ、従って広い意味での国家—社会関係の制度化に向けて取り組むべき課題が依然として多いことが指摘されている。

ペルーにおいては、なぜ強力な先住民運動が生まれえないのかという問題が研究の中心に据えられ⁷、全体に共有されている議論は以下のような筋立てとなっている。第一に、18世紀を通じた先住民的ユートピアを求める運動がつぶされる中で先住民出身のエリート層が消滅し、クレオール層エリートのみがインカ時代との連続性を担える位置を独占した。実際、トゥパク・アマルの運動が1780年に鎮圧されたことを契機として、現代まで続くインディオとメスティソとクリオーリョ層からなる民族的差異の体系が構築され、インディオ側は読み書きの権利を剥奪され、クリオーリョ層エリートはインカ時代との連続性を強調しつつも同時代のインディオは時代遅れの貧しい農民であると位置付けたのである⁸。この結果として、人々は都市への移民と教育の獲得を通じて自らの社会的位置を改善することを重視するようになり、また社会運動の側面では民族性を主張するのではなく土地を中心的テーマとする階級運動がおこることとなった。また第二に、1980年代からの内戦状態の中でケチュア語話者人口が政治暴力の主たる犠牲者となったことで、先住民の自己認識と政治的組織化が妨げられた、という議論が挙げられる。しかし、同時期にアマゾニアの先住民は、環境面（自然面）と民族面を組み合わせ、グローバルな動きとも関係を持ちながら政治的組織化を進展させてきた点が、ペルー国内の議論では頻繁に見落とされる点も指摘されている⁹（Thorp, Caumartin, and Gray-Molina, 2006）。

Paredes (2007) は、この問題関心を共有した上で、ペルーで実施したサーベイ調査とインタ

⁶ もちろん、民族面での不平等が関心を持たれ議論されるということ自体が重要な実践的目標であることは、同時に指摘できるであろう。

⁷ 我々の現地調査では、なぜ公共政策をめぐる議論の中で「先住民」という問題の立てられ方・議論のされ方がなされないのかという点が、多くのインタビューで話題となった（1-2 ペルーの項を参照）。

⁸ 同様に、現代の先住民をめぐる差別の構造が19世紀に構築されたと主張する議論に、Harris (1995) など。

⁹ ペルーのアマゾニア地域の先住民運動の進展に関し、頻繁に参照されるのは Green (2006) である。

ビュー結果に基づき¹⁰、人々が実際にどのような民族意識を持っているかを明らかにしている。大まかな結果を俯瞰すると、まず支配的な白人階層においてもケチュア語話者が広範に見られるため、言語が民族間の不平等の重要な指標にならない点が指摘される¹¹。その上で、人々はむしろ皮膚の色のスケールと、リマではなく山間部（シエラ、sierra）出身であるという地理的要因を、自らを「先住民」や「チョロ」層に位置付ける際に重視していることが明らかにされる。同時に、民族性の把握は地域ごとの状況と切り離すことができず、ヨーロッパ出身層との混血がより進んできたカハマルカにおいては、貧困層においても民族的なアイデンティティを特に認識していない場合が多い。また、自らの子供が先住民やチョロと結婚することに抵抗がある、これらの層の出身の議員候補には投票しない、これらの層の人々はその本性として暴力的で権威主義的である、などの偏見が根強く残っていることも確認されており、山間部を「後進性 (backwardness)」と結び付けて把握する傾向が広範に存在する。逆にリマに到着する山間部出身の移民は、恐れ、恥、脅威などを感じているが、リマ市でも山間部でも先住民やチョロであることを積極的に捉えなおそうとする人々の存在も指摘される。ここでは、政府や NGO に雇用される際にケチュア語の知識が必要とされることが増えつつあるという状況が関連して指摘されている。しかし、雇用や政治権力へのアクセスにおいて、外見はコネや汚職と合わせて重要な阻害要因となっているとも認識されている。

いくつかの例外（北部山地における自警団 (rondas campesinas) など）を除き、教育と雇用を求めて階層間を人々が移動しようとする中で、民族集団内の絆は失われる傾向にあり、各地域で集団的組織化の度合いは低い。上記 Muñoz, Paredes and Thorp (2007) によると、アヤクチョ県の事例においては、当初から裕福な農民と貧しい農民の間での紛争が存在する中で、都市部で新たな機会が得られずに鬱屈をためた若者層を中心にセンデロ・ルミノソが支持を集め、そしてそれに関わる武力紛争の中で（指導者層が広範に殺害されたことも含め）集合行動の可能性は大きく狭められることとなったとされる。また、サン・フアン・デルリガンチョにおいては、相対的に裕福な出自を持つ階層の居住区域では官僚との「友達になり方」も含めて集合行動に基づく巧みな働きかけがなされているのに対し、より貧しい階層の居住区域では、生活の苦しさから集合行動が困難で、かつ同時に手段としてデモ行進以外に選択肢を持たない様子が示されている。

ただし、Cánepa (2008) は、ペルーのアンデス先住民が確かに政治の表舞台に先住民運動の形では登場しなくとも、日々の生活における文化的領域においてアイデンティティをめぐる政治的なせめぎ合いが生じていると主張する。例えば首都のリマ市では、アンデス地域からの大量の移民の流入に対し、街路の「浄化」とクリオーリョ的な性格の回復を目指す取り組みが政府によって進められてきたが、それと同時にアンデス地域からの移民はそれぞれの地域の聖人ごとの単位で集団を形成し、リマ市中心部などの教会を自らの手で修復し、ケチュア語でミサを行い、街

¹⁰ この調査は、カハマルカ県バンバマルカ（北部高地）、アヤクチョ県ワンタ（中央高地、センデロ・ルミノソの大きな影響を受けた地域）、リマ市サン・フアン・デルリガンチョ（ワンタからの移民が居住する地区）の3ヵ所で行われた。

¹¹ 同様の点を指摘したものとして Chirinos (1998)。しかし、通常の慣行としては、先住民に関する統計を得る際に、ケチュア語を含めた先住民言語を話すというのは重要な指標の1つとして採用されることが多い（1-2 ポリビアの項目も参照）。

路で自分たちの祭礼と踊りを実施するための書類的手続きを行っている¹²。これはリマ市における新興企業家層 (empresarios emergentes) が中心となって文化的領域で展開する動きであるが、Cánepa は、1990 年にフジモリの副大統領候補となった Máximo San Román の例を挙げながら、そのような (アンデス出身で使用済み部品の再利用を通じて経済的成功を取ってきた、勤勉さのイメージを体現するような) 新興企業家層が、いまだ影響は小さいながらも政治の舞台に関わり続けている例も同時に挙げている。また、アンデス地域においても、各地で先住民的な知識の維持・回復と政治的・社会的組織形態の促進に取り組んできた地域的 NGO が存在し、市政府レベルにおいても先住民アイデンティティを重視する指導者層が生まれ始めている動きについても触れられている。ここでの Cánepa の展望は、政治とは断絶した形で生じているかに見える文化的領域での政治的せめぎ合いが、支配的な政治文化に対抗してその改変を迫るための実践の舞台となる可能性を見出し、かつこのような文化的運動が新たな政治的運動と結びつく可能性を模索することにある。

エクアドルについてはこの研究計画の重点対象国となっておらず、調査は限られているが、Roitman (2008) は海岸部のグアヤキル市と山間部の首都キト市で、混血 (mestizaje) がどのように言い表されるかを中心に詳細なインタビュー調査を行っている。一般的に「混血の国」であると表象されるエクアドルにおいて、混血層が先住民的なものを自らの内から排除し、先住民運動からの要求に対して混血を逃れられない事実と運命であると捉えようとする傾向があることに加えて、混血 (メスティソ) であるとされる内部で cholo (グアヤキル) あるいは longo (キト) と呼ばれる階層が、混血層の中でも「より混血的」であり「より先住民的」であるとして排除と差別を受け、機会の不平等に直面している状況を提示した。

これは我々の現地調査で得られた、同国における先住民も含めた細かな民族的差異の意識の存在を補完する調査結果として興味深い (1 - 2 参照)。

ボリビアにおいては、1781 年のトゥパク・カタリの反乱が、同時期の反乱が先住民支配層の抹消につながったペルーとは対照的に、革命的な伝統と発想をその後の時代に与え続けていくことになった。ボリビアにおいては、首都リマが遠く離れた海岸部に存在するペルーと異なり、首都ラパスが山間部に存在するという地理的条件も手伝った。この状況下で、ボリビアの支配階層は、先住民の反乱と人種間戦争の恐怖に脅えながらも先住民層の取り込みを図るようになった¹³。20 世紀を通じて展開されたこの動きは、特に 1952 年のボリビア革命において、支配政党である MNR (Movimiento Nacionalista Revolucionario) の下でパトロン・クライアント関係による各種社会団体の形成支援と取り込みが後半に行われた。しかしながら、これは同時に権力層と組合層が権力を分有する二元権力形態 (dual power) としても機能したという点が同時に指摘され、このような状況が長期にわたり不平等の存在にもかかわらずボリビアで (ペルーやグアテマラで生じ

¹² これらの団体の全体組織は Cenral Católica de Hermandades Quechuhablantes (CCHQH) と呼ばれる。

¹³ この状況を、1899 年の内戦におけるサラテ・ウィリュカ (Pablo Zárate Willka) の位置付けを中心として叙述しているものとして Larson (2004) がある。

たような) 暴力的対立が比較的生じ難いことを説明するのではないかという仮説が提示される。この状況は、ボリビア革命が1970年代に(軍事政権期も含めた)終焉を迎え、一旦はペルー同様に「先住民」という議論のされ方がなされなくなっていたボリビアにおいて、カタリスタ運動や低地先住民運動を中心として先住民アイデンティティが再度主張されるようになった頃から現代にまでも基調をなす傾向として存続しているとされている¹⁴。

1-1-2 ラテンアメリカ人類学ハンドブック (*A Companion to Latin American Anthropology*) (2008)¹⁵

(1) ボリビア

ボリビアにおける近年の先住民運動の高まりは、その開始時点が1960年代から1970年代まで遡ることができ、この時期にキリスト教関係のNGO組織(INDICEP (Instituto de Investigación Cultural para Educación Popular)、CIPCA)が、パウロ・フレイレに着想を得た民衆教育(popular education)を推進し、先住民運動を積極的に支援したことが詳細に検討されている¹⁶。これらの動きはまず1973年のティワナク宣言に結実するが、同時に、1952年のボリビア革命の後も当時のマルクス主義的な枠組みが支配的な状況の中で、先住民の運動を支援しようとする動きは依然として主流的な位置付けを占めるものではなかった。1980年代には、学術面で16世紀の地域ごと・民族ごとのアイマラの政治単位の研究が進展し、後の先住民の組織化とアイマラ民族意識の形成に大きな役割を果たした。また、NGOのレベルで、特に織物などを中心として先住民の記憶と技術の回復を通じた開発(Ethno-Development)を探る動きが生まれたのもこの時代に遡るとされる¹⁷。

当初よりボリビアにおいては、現地都市中間層の専門家と研究者層が社会運動(特に先住民運動)と密接に結びつき共有されたアジェンダの下で相互作用を繰り返してきたことが大きな特徴であった。そのような共通のアジェンダの特徴は何かと言えば、第一に、現在の国のあり方をめぐる中心主題である「多民族国家(estado multinacional)」という概念(ボリビアを均質的な国民国家としてではなく、多数の民族集団の連合体・複合体として構想する)があるが、この概念が初期的な形で提示されたのも1980年代にまで遡ることができる。第二に、当初の土地の所有権の回復要求から重点が拡大し、領域と各民族によるその所有の集会的権利(collective rights)が求められるようになっていることが挙げられる。これは、特に高地アンデス部(のポトシ県北部、オルーロ県、ラパス県のJesús de Machacaを中心とする地域)においては、NGOや研究者によるかつての共同体形態の回復運動の支援や地図の作成の取り組みと連動して進展してきたものであり、一見過去の植民地時代との連続性を思わせる先住民の自治の形態が、過去20年間の学術的取り組みとNGOの支援と連動して現代的な形で再興されてきたことが特筆される。

¹⁴ Thorp, Caumartin and Gray-Molina (2006)、Gray-Molina (2007)

¹⁵ Poole ed. (2008)

¹⁶ CIPCAについては、我々の現地調査においても重要な参照点であった(第6章参照)。

¹⁷ ボリビアにおけるこのような動きの事例に関してはHealy (2001)に詳しく記述されている。

(2) エクアドル

エクアドルにおいても、1980年代中ごろからの先住民運動のプレゼンスの拡大は、カトリック教会による組織化の支援を通じてなされたものである。ここで紹介されているのは19世紀より南東部アマゾニアのシュアのキリスト教化と文明化に関わったサレジオ修道会 (salesian order) の例であり、20世紀後半には先住民文化の保存の重要性が認識され、シュアの組織化に積極的に関わるとともに、同会の修道士らは1960年代から1970年代にかけカトリック教会が民衆宗教的形態や非西洋的な文化要素に対する容認姿勢を示していく動きの中で主導的な役割を果たすこととなった¹⁸。その後、同会は、国全体での先住民運動の高まりと二言語教育の実施と関連して、有名な Abya-Yala 出版局を設立するとともに、先住民と開発のテーマに従事する応用人類学の普及に尽力した。

20世紀後半のエクアドルは、まず1964年の農地改革という大きな出来事によって特徴付けられた。農地改革以後、特に左派の政治戦略と関連して、先住民を含めた小農が存続しえて文化的な持続性が保たれるのかに対する関心が高まった。1970年代には、文化・民族的な側面とともに植民地主義の現在における持続に対する関心が高まり、先住民共同体が果たす様々な役割の検討と併せて、人種差別に対して体系的な関心が払われることとなった。1980年代からの先住民運動の高まりとともに、先住民運動と人類学者との共同作業（すなわち人類学者が先住民運動と共有された関心・目標の下で調査を行うこと）がエクアドルでも多く行われるようになった。しかし同時に、世界銀行の先住民と黒人層を対象とした開発プログラム PRODEPINE (Proyecto de Desarrollo de los Pueblos Indígenas y Negros del Ecuador) が先住民の生活向上をもたらしておらず、先住民運動の弱体化と分裂につながっていると批判した Victor Breton の研究は、開始期においてはプログラムに賛成した先住民運動側が同プログラムの第二フェーズを拒否するに至る過程で大きな影響力を持った¹⁹。

(3) ペルー

活発な先住民運動の興隆が見られなかったペルーにおいては、リマに中心を置く主流社会の側が先住民をどう考えてきたかが議論の中心となる。1920年代から1960年代はインディヘニスモがペルーの国全体を考える際に初めて混血層や先住民をその考慮に入れていく、すなわち他者を発見しつつ自らの文化に取り込もうとしていく過程として（それに対する反動も含めて）位置付けられる。この時期の最後に現れたホセ・マリア・アルゲダス (José María Arguedas)²⁰ は、「多様な我々の全域を生きる」という新たなパラダイムの萌芽を体現したが、むしろ同時代において

¹⁸ 我々の現地調査においては、カトリック系の思想を基盤とした重要な NGO 活動 (FEPP)、およびチンボラソ県においてカトリック教会および神父が果たした重要な役割を見て取ることができた (第4章参照)。FEPPについては例えば Gavilanes de Castillo (1995) を、リオバンバ教会で「インディオの神父」と呼ばれたプロアニョ (Proaño) 神父については例えば Gavilanes de Castillo (1992) を参照。

¹⁹ この PRODEPINE に関する点は、我々の現地調査においても度々話題となった (第4章参照)。

²⁰ ペルーの作家であり民族学者。少年時代をアンデスの先住民と過ごし、ケチュア語とスペイン語の双方に堪能であり、その融合から独特の小説の文体を編み出すとともに、ケチュア語の詩をも数編残した。1969年に自殺した。日本語には『深い川 (Los ríos profundos)』、『ヤワル・フィエスタ (血の祭り) (Yawar Fiesta)』およびその他の短編集が翻訳されている。

は受け入れられなかった。そして、1980年代にはセンドロ・ルミノソが、教条的なマルクス主義に基づき、歴史の進歩の法則に従わないとされるアンデスやアマゾニアの共同体に対しても襲撃を行う時代が続くことになる。この時代を経た上で、多文化主義に対置される概念としての異文化間の相互関係を重視する考え方 (interculturality)²¹ が生まれたことを重視し、均質な共同体を前提とし他者に対する寛容を説く多文化主義ではなく、差異の相互作用が豊かさと相互の変容をもたらす可能性をも考慮に入れる新しいパラダイムの到来を見出し、2つの対立する流れをも結びつけるアルゲダス的なユートピアとの共鳴がそこに見出されるとされる。

なお、本報告書でも以下で部分的に参照するが、真実和解委員会 (CVR) の最終報告書の結論が無視されるという状況が広範に存在し、それに関して議論が十分になされないことに対して筆者らが強い警鐘を鳴らしている点が注目される。

1-2 本客員研究の現地調査から得られる知見

1-2-1 ペルー

ペルーにおいては、海岸部に立地する首都のリマ市とアンデス高地部に立地するクスコ市を中心に訪問したが、そこでは「先住民」という用語を用いるかどうかを含め両地域間で議論に温度差があることが明らかになった。リマ市においては「先住民」という用語を政策議論などの際に用いることが少ないが、クスコ市においては「先住民」あるいは「異文化間相互性 (間文化性) (interculturalidad)」を用いた議論がより盛んである²²。例えばクスコ市のバルトロメ・デ・ラス・カサス・センター (CBC) では、リマ市でのそのような状況は分かった上で、文化的に明らかに異質な性質が存在するから先住民と呼ぶのが自然であろうとの認識が示された。これはアンデス地域と海岸部の間に存在するとされる意識面での差をよく表しているかもしれない。この違いはあくまでも相対的なものであり、リマ市においても先住民問題に関心を持つ機関を訪問したことから、両者を分けて記述することはしないが、冒頭に注意として付言しておきたい。

リマ市では、訪問先の現地 JICA 事務所、OXfam GB、国際農業開発基金 (IFAD)、ペルー問題研究所 (Instituto de Estudios Peruanos : IEP) において、「先住民」が現地の政策議論にどのように現れるかを検討することができた。クスコ市では、CBC、IFAD のプロジェクト事務所、ADEAS QULLANA の事務所などで、本稿の内容に関する有益な議論を行うことができた。

²¹ 我々の調査結果では、これはリマの国際協力界においてそれほど顕著な現象ではなく、むしろ人類学者やクスコを中心とする NGO などにおいて広まっていると考えられる (1-2 を参照)。

²² Interculturalidad についての説明は第7章を参照。なお、これは元々カナダで、ケベックの位置付けに関連して、多文化主義に引き続いて1980年代前半に用いられるようになったようであり、その研究の文脈では interculturalism を間文化主義と訳すようなので、この訳語を付記しておく。しかし、この訳では少なくともアンデス地域でこの用語を用いて議論されるとき「相互に影響を与え合う」というニュアンスが失われるので、試しに筆者自身の別の訳を並べておく。このあたりの経緯および関連文献については工藤 (2009) を参照。また、この用語は米国のラテンアメリカ研究界でもほとんど使われることがなかったが、コロンビアにおいて現地で使われる用語を重視しながらなされた先住民運動の民族誌として Rappaport (2005) を参照。

まず、現地の開発に関する議論においては、単語としての「先住民」をあまり見ることはなく、「先住民」が公共政策の軸となるよりは、むしろ「農村貧困」「排除 (exclusión)」を軸として議論をする傾向が見られる、という印象が共有されている²³。すなわち、人々がアイデンティティとして自分自身を「先住民」として自己認識するかどうか、そして「先住民」としての権利は何かという議論は少なく、むしろ人々が有する経済的資源を問題とするという傾向がある。例えば Oxfam GB においては、フィールドワーク中に「先住民 (indígenas)」という単語を現地で使用することに対して慎重になるという認識が共有されており、むしろ農村と言うか、場合によっては「異文化間の相互性 (間文化性) (interculturalidad)」を用いるということであった。すなわち、人種差別を回避するためには、そもそもこのテーマに関して質問・発言をしない方がいいという見解である。

しかしながら、ペルーは非常に人種主義的で差別が広範に存在するという意識も共有されている。複数の会合で繰り返し強調されたのは、1980年代から1990年代にかけての政治暴力の時代を受けて真実和解委員会 (CVR) が2003年に発表した報告書 (CVR, 2003) の結論の重要性である。この報告書において最も注目を集めた議論は、政治暴力の被害者の割合がケチュア語話者の層において圧倒的に高く、犠牲者の75%がケチュア語を母語とする者であったというものであり、これに基づき委員会は、ペルーにおける広範な差別意識とスティグマの存在がその背景要因として働いていると指摘した。この報告書の発表を契機として、ペルーにおける人種問題・民族問題に関する議論が再度注目されることになったことは疑いがなく、様々な協力活動はこの結論を重視した上で展開しなければならないとの見解が複数の機関で示された²⁴ (その具体例としては第7章も参照)。

ペルーにおいて歴史的に存在してきたのは、インディヘニスモの潮流に基づく「腹話術的代表 (representación ventrilocua)」²⁵、すなわちアンデス部において先住民自身ではなくそれ以外の階層 (特に左派知識人や左派政党) が先住民を代表するという傾向であった (1920年代から1930年代)。その後マルクス主義の影響で「先住民」ではなく農民や貧民という用語で議論されるようになったのは、ペルーだけでなくボリビアにおいても1952年のボリビア革命に関連してよく指摘されることである (1950年代から1960年代)。しかし、その後ボリビアではカタリスタ運動が、エクアドルでは CONAIE が成立し、自らを先住民とする運動が高まったが、ペルーでは組合組織が自らを農民と位置付ける傾向が変わることはなかった (例: ペルー農民連合 (Confederación Campesina del Perú: CCP))。ゲリラ組織にしても、ボリビアではトゥパク・カタリ・ゲリラ軍 (Ejército Guerrillero Túpak Katari: EGTK) が民族意識を旗印として成立したが²⁶、ペルーのセン

²³ これがなぜかを説明するのは容易ではない。前節で検討したようにペルーにおいて強力な先住民運動が興っていないことが主たる原因となっているであろう。ボリビアとエクアドルにおける場合と比較するならば、ILO169号条約をはじめとして国際的場面で先住民が重視されるような状況においても、国内に強力な先住民運動が存在して初めて「先住民」が議論されるようになる、ということかもしれない。

²⁴ 現地 JICA 事務所訪問においては、小規模ながらという断りつきでシクアニ地域を中心として1980年代の政治暴力のトラウマ・ケアに取り組んでいるという説明を受けたことを、ここに付記しておく。

²⁵ これは、IEP の Carlos Iván Degregori 氏との会話の中で用いられたものであるが、元はエクアドルの Andrés Guerrero による用語であり、アンデスの先住民をテーマとした会話では用いられることが比較的多い。

²⁶ 1990年代初頭に創設されたとされ、フェリペ・キスペ (Felipe Quispe) やアルバロ・ガルシア・リネラ (Alvaro García Linera) などが関わったが、ごく短期間で弾圧された。

デロ・ルミノソはむしろ先住民的なものを蔑視した社会革命を目指すものであった。先住民が生活を守るために最低限度の読み書き能力を獲得していく中で、自らの民族的・文化的な要素を犠牲にすることを受け入れてきた状況があり、また、アンデス地域の混血支配者層の中ではアンデス先住民的な文化を愛しながらも被支配者層を弾圧するという両義的な態度を取ることが広範に存在してきたとされる²⁷。

現在では、プーノ県を中心としてある程度まではクスコ県でも民族意識の復活が見られる。特に、プーノ県においては、アイマラの人々による運動が強い盛り上がりを見せており、10年から20年前であれば組合の論理に基づいた言葉づかいで話していたのが、民族的 (nacional) 運動とアイマラ文化の言葉で話すようになり、先住民の権利を機軸として政治的要求を提示するようになっていく状況がある。またこれとは別に、アマゾン地域ではシャニンカなど先住民としてのアイデンティティが強く持たれていることも指摘された (1-1も参照)。これらの集団・地域は、近代化や経済成長の過程から構造的に疎外されているとの認識をもとに、国内左派だけでなくボリビアのエボ・モラレスやエクアドルを含めた国際的運動との結びつきを強め、また援助機関が先住民をテーマとして重視するようになっていくことが、民族意識の再興の背景にあるようである。なお、その他ワンカベリカ県、アプリマック県においては民族意識の再興はそれほどでもない。IEPのCarlos Iván Degregori氏はこの違いについて、国家が生活の細部まで浸透するのが、アンデス地域ではエクアドルやボリビアに比べるとペルーは早く、アマゾンにおいては遅かったことが、自らの民族意識の醸成に影響するのではないかとの見解を示していた。

同時に、首都リマ市においては、アンデス地域からの移民による新たなアイデンティティ意識の形成が見られ、この階層は以前から混血層を指すために使われてきた「メスティソ」ではなく「チョロ (cholo)」と自らのことを位置付ける。さらには、ペルーを「チョロの国 (país cholo)」として特徴付けようとする動きも存在する。ボリビアにおいては「都市先住民 (indígenas urbanos)」と呼ばれる層であり、上の階層からは蔑視される形でこの用語が用いられるが、自らのことを下から誇りを持って肯定しようとする文脈においても用いられる語である。

1-2-2 エクアドル

我々の現地調査においては、アンデス民衆行動センター (Centro Andino de Acción Popular : CAAP) のフランシスコ・ロン・ダビラ (Francisco Rhon Dávila) 氏、ラテンアメリカ社会科学院 (Facultad Latinoamericana de Ciencias Sociales : FLACSO) のルシアノ・マルティネス (Luciano Martínez) 氏、先住民文化科学研究所 (Instituto Científico de Culturas Indígenas : ICCI) でルイス・マカス (Luis Macas) 氏をはじめとする研究所関係者、およびチンボラソ県先住民運動 (Movimiento Indígena de Chimborazo : MICH) の関係者との間で重要な見解と示唆を得た。

²⁷ 上述のDegregori氏によれば、ペルーでは文学の領域においてこのような社会的状況がよく表現されており、都市で読み書きの能力を身につけてきた若者が先住民共同体において持った重要性については、上述のアルゲダスの小説*Todas las Sangres*の中の登場人物Rendón Willkaが、混血層の持つ両義的態度については同作品中Don Brunoが、これをよく示している。また、クスコにおけるケチュア語の詩人でありながら、父も息子も自身のアシエンダの農民によって殺害されたAlencastre家の例も挙げられた。

エクアドルでは、1970年代末から1980年代初頭にかけて、先住民のコミュニティより上部の単位での組織化が進み、これは現地で *Organización de segundo grado* および *tercer grado* と呼ばれている。これは研究者、先住民出身の専門家や学生、NGO およびカトリック教会の連携により生まれてきた動きであり、例えばリオバンバ市の司教であった Proaño（上述）をはじめとする解放の神学に親近する神父らの役割はこの中に位置付けられる。この動きは1988年に先住民の全国組織であるエクアドル先住民族連合（CONAIE）の設立につながり、CONAIEは1990年から2000年代初頭にかけて、先住民からの要求を提示する重要な社会抗議行動の動員に成功し一躍注目を浴びるようになった。2006年の大統領選挙において先住民運動の候補となった Luis Macas もこの一連の動きの中から生まれてきた存在である²⁸。CAAPの Francisco Rhon Dávila 氏の見解では、ペルーと異なりエクアドルでこのような先住民運動が興隆した背景には、首都に近い地理的位置での先住民の人口密度が高いことが状況要因として挙げられる。また全体としては、当初1970年代に政治運動として始まったものが、1990年代に入り人々のニーズに応えようと実務的側面を強めてきたという傾向があり、時代に応じてその姿を変えてきたという点も指摘された²⁹。

世界銀行がエクアドルで実施した先住民を対象とした大規模支援プログラムである PRODEPINE は、このような組織化の進展の上に位置付けられるものであり、先住民側に援助機関や国家との交渉能力を持つ人材が育ったという肯定面とともに、エクアドル国家による先住民組織の政治的取り込みによるクライアンテリズムや汚職の広がりという否定面も指摘されている（第4章参照）。この点を含めて、特にチンボラソ県などの先住民が集中して居住する地域において、これまでほとんどの援助機関（国際、二国間、NGO）が取り組んできたが、貧困状況が解決しないばかりか悪化の傾向も見られるという状況をどう理解すべきか、というのが我々に提示された非常に重要な問題であった。訪問先の見解では、援助活動を振り向ける先が有効に焦点化されなかった、援助に対する依存が高まった、社会的に基盤を持たない組織が援助資金を受け取

²⁸ 第二ラウンドでラファエル・コレア（Rafael Correa）が勝利した同年の総選挙において、CONAIEの政党であるパチャクティ党から出馬したルイス・マカスは、得票率2.19%で6位という結果に終わった。1990年代からの社会紛争における先住民運動の動員力と照らし合わせたときに、この結果をどう解釈すべきかは重要な問題となった。

今回の訪問先の CAAP の関係の出版物では、Báez y Bretón（2006）がこの問題を検討している。そこでは、①様々な政治勢力が複雑なパトロン・クライアント関係の網の目を張り巡らしている状況で独自の先住民候補への選挙支持を取り付けるのはあまり容易ではなく、デモ行進などの街路への動員と選挙への動員は明確に区別して考察する必要があること、②チンボラソ県をはじめとした先住民のプロテスタントへの改宗による別政治組織の成立と相互不信の増大、先住民内部での階層分岐、そして先住民性が（世界銀行および先住民組織の言説双方によって）過大に重視されることによって他の社会集団から支持を得る可能性が減少したこと、など多くの分裂要因が存在すること、③先住民というアイデンティティが流動化し戦略的に使用されていく中で、伝統的なポピュリズム的な政治手法が混血層や先住民層の重要な部分の支持を依然として集め続けていること（これはこの場合グティエレス（Gilmar Gutiérrez）候補への支持のことである）、などが指摘された。いずれにしても、この総選挙の敗北により CONAIE が先住民を代表する位置付けに窮りが生じた結論付けられている（ibid, pp. 26-32）。

ちなみに、この最後の点に関し Francisco Rhon Dávila 氏は我々との面談の中で、エクアドルで従来から軍が先住民とともに公共事業を実施してきたことによる両者の関係を考慮に入れなければならないと指摘した。同時に、先住民側は二言語教育や自分たちの言葉で話す権利は先住民組織を通じて行うがそれ以外の要求は別の政治的経路を通じて行うこともあることを認識し、先住民族的な部分が政治化されること（politización de lo étnico）と先住民族の代表の問題（representatividad de las etnias）を同一視すべきではなく（＝先住民が政治問題となるからといって先住民団体が必ずしも代表するわけではない）、また開発の取り組みとして意味があることと先住民の政治的強化として役に立つこととの間に分断があることを見極めるべきであることが強く主張された。

²⁹ 我々の面談相手である FLACSO の Luciano Martínez 氏がこの経緯を解説したのものとして、Martínez（2006）がある。

るためだけに形成され援助供与側との間で不透明なクライアントリスト的関係が構築された、などの点が指摘された³⁰。また、より広くは、先住民組織が地方政府との間に持っている関係のあり方は多様であり、例えば先住民出身の県知事や市長がいるかどうかによって、政策要求の形が変わってくることに注目の必要性も指摘された³¹。

様々な意味で純粋で本質主義的な「先住民」（例えば農村の伝統的共同体に居住するというイメージ）を排して見なければならぬ事実が、複数指摘された。男性の出稼ぎ労働が増えており、残された村で実際に物事を進めているのは女性であるという状況は様々な地域で見られる。特に南部の山間部先住民地域（Cañar, Azuay）では、都市や国際移民などにより、実際に住んでいる人がほとんどおらず儀礼のためにだけ戻ってくる村もある。先住民層の主たる所得源がすでに若年層を中心に農業ではなく手工芸品や商業などである場合も多く、これは農業に携わる人口の高齢化と併行する現象である。ここでは、「農業」ではなく「農村地域（ruralidad）」として考えることが重要になるのであり、先住民の場合も「共同体」という関係性（asociatividad）を前提としないで生産を個人化された過程として考えるべきである。すなわち、維持されるべきものは農業ではなく、農村地域の存続（reproducción）が目指されるべきなのであると主張される。これらの点を見誤ったことがこれまでの援助の失敗であるという指摘は複数の訪問先でなされた。また、だからと言って女性に決定権を委譲することに対して男性側が極めて強い嫉妬と反対を示す例も報告されている。すなわち男女間の力関係（relaciones de poder）の現状、および対等な力関係の実現に向けて配慮しない援助事業の運営は、これらの村々では実際に行き詰まる可能性が高いとの注意も示された³²。

先住民のアイデンティティを考える際に考慮すべきであると強調されたもう1つの点は、都市先住民（indígenas urbanos）の存在である。これはエクアドルにおいては「チョロ（cholo）」とは異なる存在であると位置付けられており、通常、都市に出てくると生活習慣として同一化する傾向を示すものである（これが「チョロ」である）が、服装であれ、儀礼であれ、あるいは居住区域の集団間での分断であれ、移住先の都市で「外国人」となっても元の習慣を維持するものとして説明される。従って、現在のエクアドルには、白人－混血（mestizo）－チョロ（cholo）－都市先住民（indígenas urbanos）－先住民、という体系が存在している。そしてこのような各カテゴリーが成立するには、強い人種差別の体系が根本として存在することは否定できない。

³⁰ これらの点を強力に主張し影響力を持ったのは、Breton (2005, 2001) である。

³¹ 当初は政治参加に消極的であったエクアドルのプロテスタント系先住民団体が、CONAIEによる社会動員を受けて政治参加に向けた機運が高まり、CONAIEと連携しながらも独自性を保とうとする試行錯誤の過程、およびチンボラソ県の地方レベルでのカトリック系およびプロテスタント系先住民組織双方による地方行政の掌握と運営の過程に関する研究としては、Andrade (2003) がある。また、Lalander (2005) は、初の先住民出身のオタバロ市長としてパチャクティ党（CONAIEの政党組織）から2000年に就任したマリオ・コネホ（Mario Conejo）市長に関して、インタビューを含めた詳細な考察を行っている。

実際に我々の現地調査においても、チンボラソ県知事は先住民出身であり、チンボラソ県先住民運動（MICH）との間で密な連絡の取り合いが存在することを実際に見て取ることができた。またMICHとの会合においても、県政府が参加型予算策定に取り組んでおり、MICHはそれに対しモニタリングや評価などで建設的役割を果たそうとしているとの旨であった。

³² これらの諸点に関する事例研究としてSánchez-Parga (2002)。

1-2-3 ボリビア

ボリビアにおける先住民の状況については、現地調査の実施形態との関係から第6章および第7章における記述に組み込まれている部分が多く、そちらを併せて参照されたい。本節においては、先住民をめぐるアイデンティティ意識に関するボリビア国内の議論の状況を検討することを中心としたい。

62%という数字は、近年ボリビアの先住民人口をめぐる議論で頻繁に口にされ、目にする数字である。これは2001年に実施された国勢調査において、自己認識 (autoidentificación) として先住民であるかどうか (民族帰属)、および母語が先住民言語の1つであるかどうかを質問され、その自己認識に関する質問に肯定的に答えた者の数を基に算出された数字である³³。なお、この母語と自己認識 (「自己申告制」) の2つに注目すること自体は、現代の国勢調査において広く見られる慣行のようである³⁴。

この国勢調査は、2000年代に先住民を中心とする社会運動が盛り上がりを見せる政治的動きを後押しする結果となった。しかしながら、この数字の導出は同時に多くの批判にさらされてきた。例えば、自己認識に関して、質問票自体を見ることができないが、結果の表を見る限り、回答の候補としてはボリビアに存在する複数の民族名 (ケチュア、アイマラ、グアラニー、チキタノ、モヘーニョ) とその他の先住民 (otro nativo) が示されるほかは、「右の何れでもない (ninguno)」という項目が選択されるようになってきているようである。すなわち、ここには「白人」および「混血 (mestizo)」が可能な選択肢として入っていないのであり、これらの項目を入れた場合には大多数 (65%超) が混血であると回答することになる³⁵。

母語と自己認識に基づく国勢調査の実施をより細かく批判したものとして Lavaud y Lestage (2002) がある。言語面については、その言語がどのような場面であつどれほどの知識を持って使用されるのか、あるいは単言語使用者・二言語使用者・多言語使用者のどこまでを先住民として認めるのかなどの解決されていない問題が存在する。自己認識に基づく民族帰属については、民族集団間の境界が本来持つ曖昧性、回答者が先住民であることを恥に思うことによる数字の減少と、先住民関連の専門家や国際機関は高い数字を算出したいとする思惑との関係、そもそも回答者である人々が自らのアイデンティティをこのような民族名で位置付けていない可能性、そして質問項目の配置の順番によって回答の数字に相当な差が出ることが知られていること、などが挙げられる。これらの点に基づき、Lavaud y Lestage (2002) は、質問形態によりこれほどまでに結果に差異が生じ、かつ人々の現実のアイデンティティが持つ複雑さを捉えきれないこのような国勢調査結果に、そもそも何らかの信頼性が存在するのかと疑問を投げかける。

³³ 第6章表6-1参照。それぞれの質問に対する回答結果は、ボリビア国立統計院のホームページからアクセスできる (<http://www.ine.gov.bo>)。

³⁴ 青柳編 (2004)、Lavaud y Lestage (2002)

³⁵ この筋からの批判として、例えば Laserna (2004)。また、エクアドルは「白人」と「混血」を含めた国勢調査を行っている (第4章参照)。

1996年のボリビアの国勢調査からはこの数字が66.8%と算出される (Lavaud y Lestage 2002, p. 31)。この形態では、自らを先住民と位置付ける人は10%代後半となることが多い。

ここまでの議論から見て取れるのは、先住民に関する国勢調査の質問設定は同時代の政治状況と密接に相互作用しながら形成されることであり、すなわち国勢調査そのものが政治なのである。このような状況を踏まえた上での Lavaud y Lestage (2002) への批判として、García Linera (2002) がある。García Linera (2002) は、先住民というカテゴリーを客観的に定義することが不可能であることは認めた上で、そもそも植民地期をはじめとしてこのカテゴリーは歴史的かつ社会的に支配と被支配の関係の中で形成されてきたものであり、かつ実際に人々を関係の中で否定的に位置付ける機能を果たしていることを無視することはできないと主張する。その上で、むしろこのようなカテゴリーは創出も含めて討議による政治過程の中で形成されていくものであり、これが抑圧された集団の政治的動員などにプラスの役割を果たす可能性をも同時に考慮するべきであると主張する。

ただし、同時に、むしろ政治的に中立的な立場からこの議論の難所を乗り越える努力がなされることに対しても目を向けなければなるまい。ボリビアの Fundación UNIR は、混血と先住民というアイデンティティがそもそも二律背反なのか、という問題を提起している (Fundación UNIR, 2006)³⁶。より詳細に説明すると、同機関が 2006 年に実施したベースライン調査において、「あなたは白人か、混血か、先住民か、黒人か」という質問と「あなたは次のいずれかの民族 (アイマラ、ケチュア等) に属しますか」という質問を別個に行った。その結果、前者に関しては回答者の 68.90% が自らを混血であると位置付け、後者に関しては回答者の 65.5% がいずれかの民族に属すると答えた³⁷。他の機関の調査結果も参照しながら、現下の社会状況では、かつては白人と自らを規定していた人々が混血を、そして混血と位置付けていた人々が先住民を選択する傾向が強まっており、また、人々は自らを漠然と先住民と位置付けるよりはある特定の民族の一員であると位置付ける傾向があり、また、混血というのは状況に応じて入ったり出たりすることができる都合の良い選択肢として人々に把握されていると指摘している。なお、この公刊された結果には現れていないものの、前者の質問で混血を選ぶ人と後者の質問でいずれかの民族を選ぶ人はほぼ一致しているようであるが、アイマラの人々の間では前者で混血を選ばず後者でアイマラを選ぶ人が目立って多いとのことで、これはボリビアにおけるアイマラ・ナショナリズムの強さを反映している例かもしれない³⁸。

最後に見た、García Linera と Fundación UNIR の立場の間には依然として困難な溝が存在しており、かつおそらく討議は十分なる合意を生み出さないまま何らかの (国家制度設計上の / 公共政策策定上の) 決定が迫られることとなる。しかしながら、このような政治過程と思想的課題の下で国勢調査の数字が用いられることを踏まえておくことは最低限必要であると言えるであろう。

³⁶ この機関による具体的な活動に関しては、第 7 章を参照。

³⁷ 本調査の実施前のアイディアの段階で、アナ・マリア・ロメロ・デル・カンペロ代表 (Ana María Romero del Campero) (元護民官 (Defensora del Pueblo)) は筆者 (藤田) に対して、そもそも人々が自らの現在を混血として捉えることと、先住民のルーツを過去とのつながりで持っていることと認識することは矛盾していないはずだとの着想を語ったことがある (pers. comm.)。その上で、この質問結果が示唆しているのは、これら 2 つのアイデンティティは時間軸上で明確に区別できるものではなく、同時点において人々の意識において持たれているものであるということになる。

³⁸ Antonio Aramayo (Fund. UNIR), pers. comm.

また日常的なアイデンティティ意識に関して Canessa (2006) は高地部のある村でのフィールドワークを基に、人々は日常的に自らを先住民であると位置付けることはなく、むしろ居住している村によって位置付けているのであり、差異の線を最も近接する小規模な町の居住者との間に引いていることを明らかにした。そして同時に、全国レベルで主張される「皆が先住民だ (todos somos indígenas)」とする言説が、それ自体として独自の展開を示しつつも、実際の人々の生活意識の中に何ら位置付けを持っていないと主張する。この事例が指し示しているのは、先住民のアイデンティティを議論するときにも少なくともその次元が複数存在していることであり、そのどれかが意味がないというよりは、それぞれの関わり合いに留意しながら、政策議論に携わりかつ現場での実践を行っていくということであろう。

1-3 日本を含めた国際協力活動への含意

本章で行ってきた考察からいくつかの結論を引き出すとするならば、例えば以下の諸点のようにまとめられるであろう。

(1) アンデス地域は、全体として先住民の存在によって特徴付けられることは間違いではないが、それが各国でどのようなラベルによって位置付けられ、またその差異を区別する線を軸としてどのような政策議論が展開するかは、各国で一様ではない。

(2) 20世紀後半の先住民運動の高まりには、キリスト教各宗派が、特に NGO を中心とする形態を通じて先住民の組織化と開発を推進しながら果たしてきた役割が大きく、その庇護の下に、また多くの時にそれに対する反発と自立を通じて進展してきたものである。

(3) 先住民のテーマ、広くは様々な社会関係を特に重視しないで開発の取り組みを進めるということは、既存の社会状況の中で不安定性を維持・助長する危険があり、それが暴力的な形で発現した際に、それまでの取り組みと努力が無と帰する可能性が存在する。

(4) 「先住民」をめぐる議論のされ方と人々のその利用の仕方は戦略的利用を含めた多様性を増しており、歴史的に不変なる伝統を基盤とした均質的集団を想定することはできない。しかしながら、民族的・人種的な様々なラベルが多様化・細分化されて存在することの背後には植民地主義の残存と人種主義（人種差別）が存在することは明らかであり、この点を軽視した議論を行うべきではない³⁹。

(5) 上の点と関連し、実際の先住民とされる人々の生活状況も多様性を増しており、農業を中心とする共同体的生活を営んでいるとの想定をすることは現実に合わない。村の中での個人化の進展、村の内部での階層間格差の拡大、国境越えも含めた移民・出稼ぎ労働の存在、そしてこれらがもたらす様々なジェンダー関係の複雑な緊張などを考慮しなければならない。しかし、同時に広い意味での農村という場を維持・再生産することの重要性は減じていない。

³⁹ これは別の言葉で言うならば、「民族」とは「虚構」であるがそれでもその虚構は重要であるということであり、境界線が曖昧化しアイデンティティが戦略的に使用されるとしても、それでも尊重し対等化に取り組むべき「差異」が存在するということである。

このような「ラベル」およびラベルを軸として粹取りされる問題形成のあり方の複雑性と、その国際開発協力への含意の一般論として、筆者（藤田）が関わったプロジェクトの成果に Eyben and Moncrieffe (2006) がある。

(6) 先住民というアイデンティティは、国の政治および政策に関して議論される場合と、実際の地域ごとの人々の生活における意識の持ち方とが、必ずしも対応していないことが多分にありうる。したがって、特にその地域独特の社会関係とそれが生み出すアイデンティティ意識への配慮が必要となろう。

(7) 先住民としての地位向上を主張し、かつ自らの生活状況の改善に取り組むということは、必然的に政治と開発が相互に絡み合う中での取り組みとなるが、同時に（エクアドルの場合において見られるように）両者間の緊張関係が消えることはない。先住民に対する協力とは、このような政治と開発の複雑な相互関連の中でそれぞれの援助主体が自らの位置付けを考察していくことを必要とする。

[参考文献]

<日本語文献>

- 青柳真智子編 (2004) 『国勢調査の文化人類学—人種・民族分類の比較研究』 古今書院
- 工藤庸子 (2009) 「ケベックこそフランスの未来？」『UP』第437号、東京大学出版会、pp. 56–61
- 小泉潤二・池田光穂・鈴木紀 (2006) 『中米地域先住民族への協力のあり方』 国際協力機構客員研究報告書

<外国語文献>

- Albó, X. (1999) Andean People in the Twentieth Century. In Frank Salomon and Stuart B. Schwartz eds. *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas, Vol. III South America, Part 2*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 765–871.
- Andrade, S. (2003) Gobiernos locales indígenas en el Ecuador. *Revista Andina* (Cusco: Centro Bartolomé de las Casas), No. 37, pp. 115–136.
- Báez, R. S. y Bretón V. (2006) El enigma del voto étnico o las tribulaciones del movimiento indígena: Reflexiones sobre los resultados de la primera vuelta electoral (2006) en las provincias de la sierra. *Ecuador Debate*, No. 69, Quito: Ecuador, Centro Andino de Acción Popular, pp. 19–36.
- Bretón, V. (2001) *Cooperación al desarrollo y demandas étnicas en los Andes ecuatorianos*. Quito: FLACSO.
- (2005) *Capital social y etnodesarrollo en los Andes*. Quito: Centro Andino de Acción Popular.
- Cánepa, G. (2008) The Fluidity of Ethnic identities in Peru. CRISE Working Paper, No. 46, University of Oxford.
- Canessa, A. (2006) *Minas, motes, y muñecas: Identidades e indigeneidades en Larecaja*. La Paz: Editorial Mama Huaco.
- Chirinos, A. (1998) Las lenguas indígenas peruanas más allá del 2000. *Revista Andina* (Cusco: Centro Bartolomé de las Casas), Año 16, No. 2, pp. 453–479.
- Comisión de Verdad y Reconciliación (CVR) (2003) *Informe Final*. Lima: CVR. (<http://www.cvr.org.pe/>)

cverdad.org.pe/ifinal/index.php)

- Eyben, R. and Moncrieffe, J. (2006) The Power of Labelling in Development Practice. *IDS Policy Briefing*, Issue 28, April, Institute of Development Studies, University of Sussex.
- Fundación UNIR (2006) *Encuesta Nacional: Diversidad Cultural Hoy 2006*. La Paz: Fundación UNIR (http://www.unirbolivia.org/images/stories/articulos/publicaciones/lazos_61_a_68.pdf)
- García Linera, A. (2002) Comentario: La creación del indio. *T'inkazos* (La Paz: Programa de Investigación Estratégica en Bolivia (PIEB)), Año 5, No. 3, pp. 38 – 42.
- Gavilanes de Castillo, L. M. (1995) *El FEPP: Llamada, pulso y desafío: El caminar de XXV años del "Fondo Ecuatoriano Populorum Progressio" desde la inspiración cristiana de su fundador Monseñor Cándido Rada*. Quito: Fondo Ecuatoriano Populorum Progresso (FEPP).
- (1992) *Monseñor Leonidas Proaño y su misión profético-liberadora en la iglesia de América Latina: Una aproximación crítica al pensamiento y acción pastoral del "Obispo de los Indios."* Quito: Fondo Ecuatoriano Populorum Progressio (FEPP).
- Gray-Molina, G. (2007) Ethnic Politics in Bolivia: 'Harmony of Inequalities' 1900 – 2000. CRISE Working Paper No. 15, University of Oxford.
- Green, S. (2006) Getting Over the Andes: The Geo-Eco-Politics of Indigenous Movements in Peru's 21st Century Inca Empire. *Journal of Latin American Studies*, Vol. 38, No. 2, pp. 327 – 354.
- Harris, O. (1995) Ethnic Identity and Market Relations: Indians and Mestizos in the Andes. In Brooke Larson and Olivia Harris with Enrique Tandeter eds. *Ethnicity, Markets, and Migration in the Andes: At the Crossroads of History and Anthropology*. Durham, NC and London: Duke University Press, pp. 351 – 390.
- Healy, K. (2001) *Llamas, Weavings, and Organic Chocolate: Multicultural Grassroots Development in the Andes and Amazon of Bolivia*. Notre Dame, IN: University of Notre Dame Press.
- Lalander, R. (2005) Movimiento indígena, participación política y buen gobierno municipal en Ecuador: El Alcalde Mario Conejo de Otavalo. *Ecuador Debate* (Quito: Centro Andino de Acción Popular), No. 66, pp. 153 – 181.
- Larson, B. (2004) *Trials of Nation Making: Liberalism, Race, and Ethnicity in the Andes, 1810 – 1910*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Laserna, R. (2004) Representatividad étnica. *Los Tiempos* (Cochabamba), 4 de enero de 2004. (http://www.geocities.com/laserna_r/representnica.html)
- Lavaud, J. y Lestage, F. (2002) Contar a los indígenas: Bolivia, México, Estados Unidos. *T'inkazos* (La Paz: Programa de Investigación Estratégica en Bolivia (PIEB)), Año 5, No. 3, pp. 11 – 37.
- Martínez, L. (2006) Las organizaciones de Segundo grado como nuevas formas de organización de la población rural. En Hubert C. de Grammont compil. *La construcción de la democracia en el campo latinoamericano*. Buenos Aires: CLACSO (Consejo Latinoamericano de Ciencias Sociales).
- Muñoz, I., Paredes, M., and Thorp, R., (2007) Group Inequalities and the Nature and Power of

- Collective Action: Case Studies from Perú. *World Development*, Vol. 35, No. 11, pp. 1929 – 1946.
- Paredes, M. (2007) Fluid Identities: Exploring Ethnicity in Peru. CRISE Working Paper No. 40, University of Oxford.
- Poole, D. ed. (2008) *A Companion to Latin American Anthropology*. Malden, MA: Blackwell Publishing.
- Rappaport, J. (2005) *Intercultural Utopias: Public Intellectuals, Cultural Experimentation, and Ethnic Pluralism in Colombia*. Durham and London: Duke University Press.
- Roitman, K. (2008) 'Longos' and 'cholos': Ethnic/'racial' discrimination among *mestizos* in Ecuador. CRISE Working Paper No. 58, University of Oxford.
- Sánchez-Parga, J. (2002) *Crisis en torno al Quilotoa: Mujer, cultura y comunidad*. Quito: Ecuador, Centro Andino de Acción Popular (CAAP).
- Stavenhagen, R. (2002) The Return of the Native: The Indigenous Challenge in Latin America. Occasional Paper No. 27, Institute of Latin American Studies, University of London. (http://americas.sas.ac.uk/publications/pub_occasional.htm)
- Stewart, F. (2003) Horizontal Inequalities: A Neglected Dimension of Human Development. CRISE Working Paper No. 1, University of Oxford.
- Thorp, R., Caumartin, C. and Gray-Molina, G. (2006) Inequality, Ethnicity, Political Mobilisation and Political Violence in Latin America: The Cases of Bolivia, Guatemala, and Peru. *Bulletin of Latin American Research*, Vol. 25, No. 4, pp. 453 – 480.